

シャン州南西部およびカヤー州北部（ロイコー）の概況

1987年9月30日

根本 敬

本レポート執筆時の背景説明

（2023年11月30日追記）

1985年10月から87年10月までの2年間、筆者は当時の文部省アジア諸国等派遣留学生制度に基づき、日本からの国費留学生としてビルマ連邦社会主義共和国に長期留学する機会を得た。大学院博士前期課程（修士）を終えてすぐの留学で、年齢は28歳から30歳にかけての時期である。滞在中は国内のいくつもの地方を計14回（延87泊）旅行した。このように地方旅行を頻繁におこなった理由は下記3点にまとめられる。

- (1) 2年間という長期の留学期間を与えられたなか、首都ラangoon（ヤンゴン）とその近辺しか知らないというのでは留学生として失格だと認識していたこと。
- (2) ビルマの様々な地方をこの目で見て、現地の人々とたとえわずかでも交わりを持ちたいと願っていたこと。
- (3) ビルマの日本占領期における抗日闘争に学術的関心があったため、闘争に関与した人々と会って聞き取り調査をおこないたいという目的があったこと。

計14回におよんだ地方旅行のうち、当局の許可を得て実施したものは3回（延41泊）に過ぎない。残り11回（延46泊）は無許可でおこなっている。これには特別な理由がある。当時のビルマ式社会主義下の政府は国費留学生の地方旅行を厳しく制限し、外国人旅行者が訪問を許されていた地域でさえ、なかなか許可を出さなかった。出発のひと月前までに申請を出しても、許可が下りるのが出発前日だったり、当日まで返答がないことすらあった。その結果、悩んだ末、ある段階から無許可旅行を決断せざるを得なかった。

ところが、11回の無許可旅行のうち、2回は当局にその事実が発覚し、厳しい警告を受けた。特に留学末期の1987年8月から9月にかけて実施したシャン州とカヤー州への訪問は、2度目の警告ということもあり、「最終警告書」を受け取られ、三たび同じことをしたら「強制出国」「再入国不許可」となる旨伝えられた。さらにラangoon（ヤンゴン）の日本大使館にまで通知が行き、当時の参事官が教育省に謝りに行くという事態にまで発展した。あわてた筆者は参事官に会ってお詫びしただけでなく、当時、専門調査員として大使館に赴任されて

いた伊藤利勝先生（愛知大学）の勧めに従って、日本大使館の蓄積情報になるような報告書を書いて提出することとした。そのレポートが本編である。

よって、大使館側に読んでもらい保存されることを意識した書き方になっているので、各地で世話になった私の友人や知人たちの実名や詳しい情報は（著名な文学者などを除き）伏せてある。また大使館に残される資料としてふさわしくないと判断された情報や、ごく個人的な感想や思いについても省いてある。

翌 1988 年に生じた全土的な民主化運動の前年に書いたレポートなので、今読み直すと「能天氣」なことがいろいろ書いてある。とはいっても、社会主义時代末期におけるビルマのシャン州南西部とカヤー州ロイコーの様子が地元の人々の生活の実態や政府への思いも含めて少しあはわかり、その記録としては貴重な記録だと言えるので、ここに恥を忍んで電子化した次第である。

原文はペンによる直筆で、400 字詰め原稿用紙 36 枚（約 1 万 4000 字）と自筆地図 1 枚から成る。電子化にあたっては文章に最低限の修正を施した（単純な事実誤認の訂正、現地地名や人名のカタカナ表記の統一、著しく稚拙な文章表現の校正など）。

一目次一

はじめに	3
I シャン州南西部の概況	3
① タウンジー	3
② ホーポン	4
③ インポーコン村（インレー湖）	5
④ ヤッサウ	6
⑤ ピンダヤ	6
⑥ カロオ	8
II カヤー州北部（ロイコー）の概況	9
① ロイコーへの道	9
② ロイコーに着く	10
③ バダウン民族の女性	11
④ 地元民との会話から知り得たロイコーの現状	11
おわりに	12
附録：1987 年 9 月 5 日の主要紙幣廃貨令とマンダレイにおける暴動について	13
地図（別紙）	

はじめに

文部省アジア諸国等派遣留学生として、1985年10月よりビルマに留学している筆者は、1986年1月-87年9月にかけてシャン州南西部に7回、カヤー州北部（ロイコー）に1回旅行をおこなった。目的は第一義的には観光であるが、第二義的には専門のビルマ独立闘争史の研究の一環として、第二次世界大戦中に日本の支配を経験したり、抗日活動に従事した人たちと会って、その方々の体験や対日観などを聞かせてもらうことも含まれていた。

これらの旅行で知り得た事柄は、本来は日本に帰国してから書く論文やエッセイにのみ活用すべきものだと考えるが、在ビルマ日本国大使館にとって地方の情報は少しでも多いほうが良いかと考え、僭越ではあるが、ここに筆者がまわった地域の概況についてのみ記して提出する次第である。

I シャン州南西部の概況

シャン州南西部はビルマ有数の観光地であり、とりわけタウンジー、ピンダヤ、カロオ、インレー湖は外国人観光客が多数訪れる地域である。従って比較的情報も多く、とりたてて詳しく書くべきこともないようと思われるが、各地の住民たちとの交流の中から得た情報や知識を中心に、訪問した各時点での状況を簡潔に報告することにしたい。

①タウンジー

シャン州の州都であるタウンジー市は、海拔1400m余の高原に存在する。シャン州南西部の入り口であるヘーホー空港から東に約40km、車で70分ほどかかる所で、シャン州の行政・経済の中心地であるといってよい。

市街地の西側は広大な盆地に接し、シュウェニャウン市一帯が一望できる。東側には崖状の山があり、その山頂に上るとタウンジー市一帯のみならず、西側のシュウェニャウン市および西南のニヤウンシュエ市、さらにインレー湖北側までもが一望できる。

市内にはランマドオと呼ばれる大通りが南北に一本通っており、そこを中心に東西に市街が広がりを見せている。涼季に来た時（1986年1月）は桜が美しく咲き、暑季に訪れた時（1987年4月）は青紫色のセインパンの花が町中にあふれていた。

住民の中にシャン民族はそれほど多くなく、インダー民族、パオ民族をよく見かけるほか、インド系の人々もかなり見かけた。ビルマ民族も少数だが存在する。宗教的には仏教を中心にイスラム教、ヒンドゥー教、キリスト教が共存している。

市街地の東側のやや高台になっている一帯には、かつてのソーブワ（藩王）達の家や別荘がある。また裕福な人たちの家も多く、この地域に住みたがっている市民も多い。それは単にステータス・シンボルを求めるということよりも、現実問題としてこの一帯は水の便が良く（水源が近い）、断水がないからである。タウンジー市の抱える深刻な問題として人口の増加に伴う水不足があげられる。市街地大通りの南側や西側の大部分は暑季になると断水

に見舞われ、水を外から買わなければならぬ。1987年4月に知人の家を訪ねた時、その家では一滴も水が来ない状態が2ヶ月以上も続き、ドラム缶一個分20チャットで毎日外から水を買っている有様であった。国営ホテルや重要な公共施設、ビルマ社会主義計画党(BSPP)や人民評議会の幹部宅などには優先的に水をまわしているようだが、一般市民に対しては全く対策がたてられておらず、水不足の原因の説明や今後の改善計画すら伝えられない。1987年8月に訪れた際も、雨季にもかかわらず水不足は続いており、暑季のころほどではないにせよ、一日数時間という制限給水が見られた。市街地西南部の一部地域は、ここ10年程のあいだに外部から流入した人々のために、スラム一歩手前のような状況になっているが、これらの人々による水の使用が水不足をいっそう悪化させていると指摘する市民もいる。

一方、電力は比較的安定的に供給されている。筆者の4回にわたる滞在中、停電には1回しか出会わなかった。また、知人に尋ねてみても、停電の苦労はほとんどないとのことであった。同じシャン州南西部でも、後述するピンダヤやカロオは慢性的ともいえる電力供給不足に陥っており、それと比べるとタウンジーは恵まれているといえよう。

経済面に視点を移すと、市内に出回っている商品にはタイからの密輸品が目立ち、タイとの経済的なつながりの強さを感じさせる。一方で、1986年10月頃から始まった国産のマンダレイ・ビールの生産減によるビール不足は、中国製缶ビールの流入を招いた。マンダレイ・ビールの公定価格は一本9.5チャットだが、実際は1本60チャット前後で売られているので(1987年8月時点)、量は少なめとはいえるが、40チャット前後で手に入る中国製缶ビールに人気が集まっている。ガソリンもきわめて高価で、1986年8月時点で1ガロン50チャット前後だった実勢価格が、87年4月時点では(水祭り直前の時期ということもあって)同110チャット前後に跳ね上がり、同年8月時点では少し下がったとはいえる、90チャット前後であった。だいたいラングーンのヤミ価格の1.5倍から2倍程度を見てよい(これはマンダレイも同じである)。従ってバスやタクシーの料金もラングーンより割高である。特にここ一年間でガソリン代が約2倍になったため、バス代も50%以上値上がりしている。例えば、タウンジーとピンダヤ間は1986年8月時点で片道20チャットだったが、一年後の87年8月に乗ったときには1.5倍の同30チャットになっていた。これ以上値上げしたら乗る人がいなくなってしまうのではないかと危惧する人もいる。

現政府に対する不満の声は個人的な会話レベルにおいてかなり聞かれた。もともとビルマ民族に対する信頼が強固ではないところに、1962年以降のビルマ式社会主义が入って来たため、不信には根強いものがある。停電、断水といった苦労とは無縁の社会主义計画党や人民評議会の幹部らに対する感情も悪化している。さらにビルマ全国で見られる現象だが、官吏の腐敗にもはなはだしいものがある。

②ホーポン

ホーポンはタウンジーから東へ約20km、バスで25分、ロイレムとのあいだに位置する

小さな町である。最近（1987年8月）、ビルマ航空の国内線がこの付近の山に激突したことでも有名になったが、観光コースからは完全にはずれており、外国人でここを訪れる人は少ない。ここから先は叛乱軍の出没地域でもあり、シャン州南西部のホワイト・エリア（中央政府の完全支配地域）の最も東側に位置する町ともいえる。

筆者はこの町を1987年4月に一回だけタウンデーから軽トラック改造型のバスに乗って訪れた（片道7チャット）。盆地なので気温はタウンデーより高く、また埃っぽい町であった。主産業はタバコの葉と茶の生産である。タウンデーとの物資や人間の交流は活発で、前述のバスも1時間に1本の割合で運行されている。ホーポンから南へ下ってカヤー州ロイコーに向かう道があるが、叛乱軍がよく出没し、この道を通ってロイコーへ向かうことは危険とのことであった。しかし、定期バスは走っている（タウンデー ⇄ ホーポン ⇄ ロイコー）。

③インポーコン村（インレー湖）

シャン州南西部最大の観光地であるインレー湖一帯には多くの村々が存在するが、このインポーコン村はそれの中でも一、二を争う大きく裕福な村である（人口約3000、世帯数約300、いずれも村人との会話を通じて得た情報に基づく）。インレー湖南西部の半島のような部分に位置し、湖の北端のニャウンシュウェ市よりモーターボートで約1時間30分かかる所にある。

筆者は1987年4月に一泊この村で知人の家に泊めてもらった。村内および村外との交通は舟か徒歩のみで、車の便は一切ない。ほぼ完全な水上社会である。しかし、トマトなどを中心とする野菜の浮島（フローティング・アイランド）での栽培、家内工業による高級ロンデーおよび布製の肩掛け袋（ルウェーエイツ）の生産と販売によって潤い、村内には裕福な家々が多い。筆者の泊まった家も水上に建てられた二階建ての大邸宅であった。村に電気は来ていないが、ほとんどの家に自家用発電機が設置され、夜間に苦労することはない。村での生産物の多くはニャウンシュウェ市を経由して各地へ売られているため、自家用モーターボートを保有している家も多い。テレビ放送は受信できないが、ビデオデッキを購入してビデオテープを視聴している家があり、その豊かさには驚かされる。

住民はインダー民族が大半で、全員が仏教徒である。中央政府に対する反感は強く、ビルマ政府のことを「ラングーン政府」と呼ぶ人たちが多い。ある青年は「この村では言論の自由が保証されているから、君も何をしゃべってもいいんだよ」と冗談とは思えない口調で言うので、「外に警官がいたが心配ないのか」と聞くと、「彼には金を渡してあるから大丈夫」とあっけらかんと語っていた。村人達の性格はこの上もなく純朴で、突然やって来た日本人である筆者をまるで昔からの仲間かのように迎え入れてくれ、自家製の酒で夜遅くまで歓待してくれた。

翌朝6時頃、舟で付近をまわると、美しい花や供え物を持って近くのパウンドーウー・パゴダに向かう人々の舟とすれちがった。パウンドーウー・パゴダはインポーコン村からモーターボートで10分くらいの所だが、途中かなりみすぼらしい家も見かけるので、インレー

湖全体では貧富の差が大きく存在すると言ってよい。観光客ズレした一部の子供達が日本人の私に「ボールペン、ボールペン」と騒ぐのは、ここを訪れる元日本兵らが気前よくペンやお菓子を配るからであろうか。母親らしき女性が子供を乗せて、器用に両手でオールを持って舟を漕いで行く姿も多く見かける。インレー湖の有名な風景であるインダー民族による片足漕ぎは今でも続いている漕ぎ方であるが、この時はあまり見かけなかった。

④ヤッサウ

タウンデーから西側へ下り、シュウェニャウン市を経て、そこから北方へ約 58km の所に位置するヤッサウは、シャン語ではロークソーグと呼び、かつて（1950 年代末まで）ソーブワと呼ばれるシャンの藩王が支配した町である。今でもかつてのソーブワの館（ホーナン）が残っている。タウンデーから車で 2 時間、定期バスもあるが、筆者が訪れた 1987 年 4 月はちょうど水祭りの直前で人々の移動が激しく（日本の盆の時のような状態）、ガソリン代が急騰するためバスも本数が減り、やむなく車を一台借り切らざるを得なかった（タウンデーから往復で 700 チャット）。

古いパゴダがよく似合う静かな町は暑季のシャン州の象徴ともいえる青紫色のセインバンが咲き乱れ、盆地であるためタウンデーより気温が高く、日中は体から汗が流れ出る。ミカン畑が多く、この町の中心産業のように見受けられた。住民はダヌ民族が多い。

この町にはティンタントゥンという有名な作家兼少数民族研究家が住んでおり、ヤッサウを中心とするシャン州南部の歴史や文化をまとめた雑誌も発行している（1986 年現在）。残念ながら本人不在のため会えなかったが、氏の友人ウー・サントゥンとは会うことができ、日本軍がビルマを占領した時期におけるヤッサウの状況や抗日活動について話を伺った。

ちなみに、ヤッサウから北へ少し行くとバトゥーという小さな町があり、そこにはビルマ国軍の士官学校がある。バトゥーはもともと地名ではなく人名で、日本占領下の末期（1945 年 3 月）、マンダレイ一帯で一足早く日本軍に反旗をひるがえしたビルマ国軍のバトゥー少佐（病死後 2 階級特進で大佐）のことを指す。バトゥー少佐率いる約 250 名の部隊はマンダレイ、マダヤー、チャウセー一帯で 1945 年 3 月後半に反乱を開始したのち、シャン州に入り、この地を経てピンダヤに向かい、その後アウンパンに達し、日本軍を攻撃した。バトゥー少佐はしかし、アウンパンを陥落させる直前、熱病のためこの世を去った。国軍リーダーのアウンサン少将から最も信頼されたていた軍人の一人だったため、彼の死を知ったアウンサンは号泣したという。彼を記念してバトゥーは地名となり、その地に独立後、士官学校が開設されるに至った。彼を記念する碑もアウンパン市の中心に建てられている。

⑤ピンダヤ

ヘーホー空港から西へ 35km ほど、アウンパン市を経て、そこから北へ約 39 km に位置するピンダヤは、西欧人から「小さなスイス」と呼ばれることもある美しい町である。アウンパンからピンダヤに向かう途中、車の中から牧畜や高原野菜の栽培などの風景をのんび

りと楽しむことができる。

交通の便はしかし、あまり良くない。タウンジーからの直通バス（軽トラック改造型）が2社あるが、いずれも一日2便のみで（片道30チャット）、それも途中のアウンバンで荷物の上げ下ろしのため一時間以上も停車し、ピンダヤ到着までに4時間もかかる（ただし、逆方向はアウンバンで上げ下ろしする荷物が少ないため短時間しか停車せず、3時間で済む）。アウンバン↔ピンダヤ間のバスはもう少し便数が多いが、これらは定時発車ではなく、客と物資がそろったら発車するという前近代的なバスで、それもジープを改造したものにすぎず、本来の定員（6人）の3倍以上の20人前後を乗せるのが常である。ピンダヤで五日市が開かれる時はカロオからも直通バス（ジープ改造型）が一往復だけ出る。

ピンダヤもかつてソーブワ（藩王）が支配した町で、町のやや北のほうに旧ソーブワの館（ホーナン）が残っている。町の中央には非常に美しいピンダヤ湖があり、人々は洗濯や水浴びをここで行う。このピンダヤ湖はよく人口湖に間違われるが自然湖である。この湖を囲むかたちでピンダヤの町は形成されている。筆者はこれまでに計5回ここを訪れたが、毎回新鮮な気分にさせられた。

住民はダヌ民族が大半で、ほとんどが仏教徒である。この町には教会もモスクもヒンドゥー教の寺院もない。一方、仏教寺院は町の大きさとは不釣り合いなほど多く存在する。ある意味ではパガンよりも仏教的な町かもしれない。

ここも盆地であるため、特に3月から5月の暑季は高原地帯であるにもかかわらずかなりの暑さを感じる。また埃っぽい町でもある。主産業は茶や野菜栽培で、最近はビルマ政府の指導の下、コーヒー生産にも力を入れ、そのほかの果樹園も増えている。

ピンダヤは昔から「ビルマ通」の観光客がカロオやタウンジーから日帰りで訪れる「知る人ぞ知る」観光名所だったが、1985年に国営のピンダヤ・ホテルが開設されてからは、より多くの人々が宿泊を兼ねて訪れるようになった。特に町の南西部にあるシュエウーミン洞窟は有名になり、洞窟内に数千個も安置されている大小さまざまの仏像が訪れる人々に宗教の粹を超えた感動を与えていた。ここで修行する僧侶や信徒もあり、けっして単なる観光名所ではなく生きた信仰の場所となっている。このほかピンダヤの町から北東へ約6.5km行った丘の上にあるガロウンタウン僧院も有名である。この高僧は全国的に知られているため、各地からビルマ人の信徒が訪れる。ただし、外国人観光客は例外的にしか訪れない。

1987年3月以来、アウンバン、カロオと共にこのピンダヤも電力供給不足に見舞われ、夜6時から9時ころまで全戸停電することが日常となっている。自家発電設備を持っておるのは一部の僧院と学校（夜間コースがあるため）、病院および私営のホテルだけで、あとは真っ暗となる。

1986年以降、悪化するインフレのためにビルマの都市部では食糧品の物価上昇が激しいが、ピンダヤはそれほどではない。1987年5月現在、ラングーンやタウンジーで1ペイター60チャット以上する鶏肉も、ここピンダヤでは35-40チャットで買える。このほか、市場の開かれる日には野菜類も安く豊富に手に入る。ただし、ガソリンはタウンジーと同じく、

ラングーンと比べてきわめて高い。

住民はインポーコン村と同様、純朴かつ親切で、筆者は最後のソーブワだった方の孫娘と留学中に親しくなり、その女性の祖父や家族らが住む旧ホーナン（ソーブワの館）に2回行かせてもらった。木造二階建ての大邸宅は老朽化しているものの、中には広々とした部屋が三室ほどあり、かつての栄光を彷彿させる写真がたくさん飾られていた。別室には仏像が安置しており、そこは特にきれいに維持されていた。ソーブワの家族と言っても、今では普通の人々と変わりなく、若者たち（子供や孫たちの世代）はギターを弾き、都会や外国にあこがれを抱いている。ピンダヤの旧ソーブワ一家はタウンジーとラングーンに別荘を持っているので、よくピンダヤの町を離れるという。私と親しく接してくれた孫娘も国営旅行会社のトゥーリスト・バーマ職員なので、公用でラングーンに出かけることが多い。

⑥カロオ

英領植民地期からの有名な高原保養地カロオは、ヘーホー空港から西へ約44kmの位置にあり、車で小一時間ほどかかる（タウンジーからは2時間、ピンダヤからは1時間40分、いずれもノンストップの場合）。途中、通過するアウンバン市（カロオ郡）が商業の盛んな町であるのに対し、カロオ市は行政の町である（ただし、カロオ郡自体はタウンジー郡より広大で、行政区画としてのカロオ郡の主産業はあくまでも農業である）。もともとは寒村だったものを、英国人が暑季の保養地として目をつけ開発したものであり、そのこともあり、かつての高級官僚や英國資本の幹部らが住んだ別荘、ホテル、病院、役場等が市内の主たる建物である。街中には市場もあり五日市の日は賑わう。

交通の便は比較的よく、乗客が25人ほど集まるとアウンバンまで走るジープ改造型バス（本来は6人乗り）のほか、タウンジー行きの同様のバスの本数も多く、タウンジーからメイティーラ経由マンダレイ行きと、同ラングーン行きの大型バス（いずれも日本にあるような一般的のバス）も、全てカロオに一時停車する。鉄道は一日上下各3本が運行され（カロオ駅に停車）、シュエニヤウンへは2時間30分、ラングーンへは23時間以上かけて到着する（ラングーン直通は一日一本のみ）。常に超満員で、屋根の上にまで客が乗るため大変危険で、一度事故が起きると多くの死傷者がいる。実際、1986年7月にカロオの手前で起きたブレーキ故障による転覆事故では40人余が命を失ったと言われている。

気候は年間を通じて涼しく、涼季（12月－2月）の朝夕は厚手のセーターやジャンパーなしでは過ごせないほど寒くなる。暑季（3月－5月）でも正午前後を除いてはそれほど暑くなく、だいたい日本の初秋から初冬の間で温度が変化していると言ってよい。ただし、雨季（6月－10月）は下ビルマほどではないがかなり雨が降る。

もともとは林が多く、木々に恵まれた町だったが、戦後の乱伐がたり、木が減ってしまい、そのため本来はもっと涼しい町だったのが、暑季に風が吹かなくなってしまったと嘆く住民が多い。現在、木の伐採はきびしく制限されている。住民は多様で、シャン、ダヌ、カレンの各民族のほか、インド系が目立ち、少数だがビルマ民族もあり、中国系や英系ビルマ

人もみかける。宗教的には仏教徒が少数派で、イスラム教徒とキリスト教徒が多い。キリスト教はローマ・カトリック、英國国教会（聖公会）、カレン・バプテストの3つの教会が市内にある。

戦争中、日本軍の兵站基地がおかれていたため、今でもここを再訪する元日本兵は多く、彼らと知り合いの住民の少なくない。かつての兵站基地は現在のビルマ国軍の幹部教育施設と陸軍基地になっている。しかし、基地の街にありがちなピリピリした様子はなく、あくまでものどかな高原の町である。

国営のカロオ・ホテルは戦前に建てられ英國人に利用されていたが、独立後は1970年代半ばまでインド人による経営だった。それをビルマ式社会主义下で政府が30万チャットで接收し、現在に至っている。瀟洒な建物と居心地の良い部屋のために根強い人気があり、3月から5月にかけては外国人のみならず裕福そうなビルマ人の長期滞在者もみかける。

このカロオにも1987年3月以降、電力供給不足がおそいかかり、特に3月中旬から4月中旬までの4週間は市内の大半が全戸停電という最悪の事態に陥った。そのため水道もストップし、筆者が4月中旬に前述のカロオ・ホテルに宿泊した際は、シャワーが使えないため、やむなくホテルの裏庭にある（普段は従業員が使う）緑に変色した「ため水」で水を浴びざるを得なかった。この長期停電と断水は、4月中旬にビルマ社会主义計画党議長ネイウィン氏の娘一家がカロオとピンダヤに保養に訪れたため、4週間で終わりをみたが、もし一行が来なかつたらさらに停電と断水は続いたのではないかと地元住民は語っていた。4か月後の1987年8月に訪れた時も、連日夜6時から9時まで市内の半分以上の地区が停電に見舞われていた。カロオ・ホテルをはじめとする一部の公共施設、人民議会や党の幹部らの官舎は停電を免れていたが、一般住民が直面する不便さは3月以来ほとんど解決されていない。

ちなみに数年前からテレビ放送の受信が可能となっているカロオであるが、テレビ受像機を所有する家はまだまだ少数である。電話も町全体で90台しか設置されておらず（よって市内電話番号は二ケタで済む）、それもタウンデー方面への接続は良いものの、ラングーンやマンダレイへかけるときは電話局に申し込んでから一時間以上待たされるのが現状である。

II カヤー州北部<ロイコー>の概況

①ロイコーへの道

シャン州南西部からカヤー州の州都ロイコーに入る道は二本ある。ひとつはI-②でも触れたようにタウンデーから東側へ少し進んでホーポンに出て、そこからロイコーへ南下する道である。この道はしかし、定期バスが通るとは言え、ダヌ民族の武装勢力がしばしば出没するため危険である。もうひとつの道はタウンデーから西へ向かいアウンバンに出て、そこから南下し、ピンラウン、ペーコンを経てロイコーへ至る道である。こちらは道が悪く、

大雨が降ると通行不能に陥るが、武装勢力出没の危険性はない。軽トラック改造型のバスもタウンダーから走っている。したがって筆者はこの道を通って1987年8月にロイコーへ入った。

バスは早朝6時にタウンダーを出発、運賃は片道50チャットだが、10チャット余計に払って運転手の横の席に座させてもらった。8時前にウンバンに着き10分ほど休憩したあと、バスはカロオ方面へ少し走り、しばらくして左側へ曲がってカヤー州へと南下していく。ウンバンからロイコーへは約150kmある。南下を始めてもかなりの間「カロオ郡」の標識が見られ、行政区画としてのカロオ郡がいかに広大か実感させられた。まわりは山や丘が多いにもかかわらず、水田耕作が見られ（棚田がある）、南へ下るにつれて梨などの果樹園が増えてくる。

カロオ郡を抜けたあたりからパオ民族の村々が現れるようになり、午前10時前、バスはパオの町であるピンラウン市に着く。ここで早めの昼食をとりながら道行く人々をながめるが、多くのパオ人が日本の下駄と同じようなものを履いているのが印象的であった。

バスは引き続き南下し、インレー湖南端の絶景を左側に見ながらペーコン市へと向かう。このあたりからパオの人々の姿は消え、かわってバダウン民族が現れる。それと同時にキリスト教会が目立って増え、正午前にペーコンへ着いた時は町の真ん中に大きな十字架が建っているのを目にして、バダウンの人々へのキリスト教の普及がかなりのものであることを知らされた。バダウンといえば女性が首に真鍮の輪を多数はめて、一種の「首長（くびなが）」のような姿で過ごしていることで知られているが、現在ではほぼ50歳以上の女性にのみ残る風習で、若い人達の間ではその慣習がすたれ始めていると言われている。そのためか、ペーコン付近でこうした姿の女性をすれ違うこととはなかった。

②ロイコーに着く

12時30分、州境を越えカヤー州に入る。ここからロイコー市へはわずかである。午後1時過ぎにロイコーに到着、私に同行してくれているタウンダー在住のビルマ人弁護士のT氏に連れられて、氏の知り合いの家へ挨拶に向かい宿泊を願い出ることにした。はじめA氏という元弁護士の家を訪ねるが、本人外出中のため会えず、氏の夫人に伝言を頼んだのち、T氏のもう一人の知り合いで元裁判官のB氏の家へ行く。B氏は歓迎してくれたが、ロイコー市郊外への案内は前夜にビルマ国軍と地元の武装勢力との間で戦闘があり、国軍が大敗を喫して80名の戦死傷者を出してびりびりしているので、我々を案内することはできないと語った。私とT氏はロイコー市内の案内だけで十分であると伝え、その上で宿泊を願い出た。

その時、我々の到着を夫人から伝え聞いたA氏がB氏宅に現れ、結局その晩はA氏の家に戻って泊まることになった。夕方、日本占領期の元抗日ゲリラ兵だったB氏の兄がA氏宅を訪れたので、当時の話をたくさん聞かせてもらった。その後地酒のワインを飲みながら、A氏夫人の手料理をおいしくいただき、話に花を咲かせ、夜9時に就寝した。

③バダウン民族の女性

翌朝早く、市内をまわるためA氏の知り合いからジープを一台 150 チャットで借り、A 氏、B 氏およびT 氏と共に、まずはロイコー市北部に住むバダウン民族の一家族のもとを訪問した。そこでは首から肩にかけて真鍮の輪をいくつもついている 56 歳の「首長（くびなが）」の女性がいて、快く我々と接してくれた。さらに盛装のうえ写真撮影にも応じてくれた。首に 27 個、足の上部に 15 個、株に 25 個の真鍮製の輪をはけており、他の衣装との組み合わせにより一種独特な美しさを醸し出していた。この女性は終始ニコニコしており、自分の容姿に誇りを持っているようであった。

バダウンの人々にとって、女性が首や足に多くの金属製の輪をはめることが「美」だったのであり、またそれはその女性の経済的豊かさを示すものでもあった。しかし、若い世代のバダウン女性にこの風習は受け継がれることなく、現在ではすたれつつある。バダウンの人々はカトリックが多く、この女性と家族も全員カトリック信徒で、家の中にはイエスの肖像画やマリア像が飾られていた。ビルマ語はしゃべれず、バダウン語だけしか通じなかったが、A 氏も B 氏も同じバダウン人であるため、両氏を介してこの女性と意思疎通ができた。

④ 地元民との会話から知り得たロイコーの現状

このあと、市内のパゴダや公園をまわり、カトリックの女子修道会が経営する孤児院にも訪問してシスター達と話をした。ここではその詳細を省略し、以下、A 氏や B 氏との会話から知り得たロイコーの現状について記すことにする。

ロイコー市の住民は主としてカヤー（カレンニー）民族とバダウン民族によって構成され、全住民の約半分がキリスト教徒である（残りは上座仏教徒と精霊信仰実践者）。キリスト教の中でもローマ・カトリックの信徒が多く、市内には教会の建物が目立つ。

治安状態については、勢力約 500 人（ビルマ国軍側の発表では 200 人）のカレンニー民族解放戦線（K N L F）が、カレン民族同盟（K N U）やビルマ共産党（B C P）と暫定的に組んで、日夜ビルマ国軍と郊外で戦っているため、市内は安全だが市外は危険が多いと言う。しかし、叛乱軍は地元住民を襲わず、ビルマ国軍とその関連施設のみ攻撃するため、叛乱軍を恐れる住民はほとんどおらず、逆に支持している人々が多いと言う。

昔から藩王の支配の下で一定の独立空間をビルマ王朝に対して保ってきたカヤーの人々にとって、ビルマ民族は縁の薄い存在であり、現在も名目的な自治権しか与えられていないため、かなりの不満があるように見受けられる。ビルマ国軍が叛乱軍討伐のため、時として無関係の村人達を先頭に巻き込んだり殺害したりすることも、彼らにとって見過ごすことのできないものである。ビルマ式社会主義そのものに不満を抱いている者も多く、これらの気持ちが複合して叛乱軍への消極的支持が成り立っているようである。叛乱軍はけっして優勢ではないが劣勢でもなく、若い世代の入隊も途絶えていないらしい。

ビルマ語では社会主義（socialism）のことをそのまま音訳して「ソウシェリッ」と呼ぶが、バダウン語の似た発音「ソウセリッ」という単語には「借りた金を返さない」という意味が

あると言う。そのためバダウンの人々の中で教育を受ける機会に恵まれなかつた人達の中には、「バマ・ソウシェリッ」（ビルマ式社会主義）を、そのまま「ビルマ人が我々からお金を借りたまま返さない体制」と解釈している場合があるらしい。

元裁判官のB氏は、ロイコー郡の元人民評議会議員でもあった。しかし、ビルマ式社会主義に失望し、任期途中で辞職したという。一方、元弁護士のA氏は、弁護士を辞めて久しいが、ビルマという国に何らの期待も持てなくなつたため、時を見てタイに陸伝いで脱出したいと語る。少なくとも子供達は成人したらタイ経由で海外に行かせたいらしい。このように二人とも現状のビルマに強い不満を抱いている。

ロイコーの電力供給状態については、付近に日本の戦後賠償で建設されたローピータ水力発電所（バルーチャウン計画）があるので問題ないように思われるが、実際にはそこで発電された電力が首都ラングーンと第二の都市マンダレイに送電されるため、地元への恩恵はほとんどないと言う。ロイコーの夜景を少しみせてもらつたとき、カヤー州の州都であるにもかかわらず、電力不足で暗いという印象を受けた。また、ローピータ水力発電所は叛乱軍に目をつけられやすい施設なので、治安維持が厳重で、そのため外国人はもちろんのこと、地元住民も特別の許可がない限り近づくことは許されない。内外の専門家が施設に近づいて入るときは、国軍から一個小隊が護衛につくとのことである。水の供給については各戸が井戸に頼っているため、それほど不便はしていないように見えた。

カヤー州にはテレビ放送がいまだ届いておらず、州内には大学も2年生大学（カレッジ）も存在しない。この州はビルマで最も面積の小さい州で、経済的にもチン州と共に最も貧しい状態にあるとA氏とB氏は強調していた。タウンジーから同行してくれていた弁護士のT氏も「ビルマ政府はカヤー州を軽視している」と批判していた。

ロイコーでの2泊目はB氏の自宅に泊めてもらい、3日目の早朝6時発のバスに乗り、T氏と共にシャン州のタウンジーに戻った。帰りの風景もとても楽しめた。

おわりに

以上、簡潔ではあるが、1986年1月から1987年9月にかけてのシャン州南西部およびカヤー州北部（ロイコー）の概況を筆者が知り得た範囲内でまとめてみた。

一見のどかで平和に見える所ばかりだが、一般の生活においては停電や断水に悩まされている地域が多く（タウンジー、ピンダヤ、カロオ）、また叛乱軍がかなり身近に存在する地域も見られた（カヤー州ロイコー）。ビルマ政府に対して不満を抱く住民もタウンジー、インポーコン村（インレー湖）、ロイコーで見られ、各民族の自立意識の強さとビルマ式社会主義のこれらの地域における不人気を実感させられた。無論、これらがただちに集団的な反政府行動へつながったり、叛乱軍への積極的支援に連動することは考えにくいが、今後ビルマ政府が彼らの福祉向上のためにどのような努力を行うのか注目していきたい。

<附録>

1987年9月5日の主要紙幣廃貨令とマンダレイにおける暴動について

1987年9月5日午前11時、ビルマ政府はラジオ放送を通じて突然75チャット、35チャットおよび25チャット各紙幣の即日廃止を宣言した（1964年、85年に次ぐ3度目の廃貨令）。その後、12時30分にテレビ放送でも同じアナウンスがなされた。25チャット紙幣という階層を問わず一般的に使われている紙幣が含まれていたこと、かつ公務員に対する救済措置のほかは何ら代替措置が発表されなかつたことなどから、9月5日の夜にはラングーンで一部大学生による暴動が発生し、またマンダレイでも同6日、一般市民を含む暴動が起り、一部地域に外出禁止令が出されるまでに至った。

筆者はたまたま9月5日にマンダレイに滞在し、その後9月14日から3日間再び訪れる機会を持った。また、9月7日にマンダレイからラングーンに戻って来た「闇商人」（密貿易品を扱う小売業）の知人と接する機会もあり、マンダレイで起きた暴動について報道されていない事実を多少とも知ることができたので、ここにまとめて報告することにしたい。

9月5日午前11時のラジオ放送を聞いた市民は多くなく、12時30分のテレビによる放送まで全市民には主要紙幣3種の廃貨令は伝わっていなかった。筆者はこの日、午後にシャン州のラーショウ（ラシオ）に長距離バスに乗って向かう予定でいた。市内の中心地で知り合いと共に正午少し前に食事をとったが、そこの店の主人は「75チャット紙幣と25チャット紙幣が使えなくなったという噂が出回っている」と語りつつ、筆者の払った25チャット紙幣3枚の受け取りを拒否しなかった。その後、バス停に移動する途中で12時30分のテレビニュースが流れている商店街を通り、多くの人々が群がって騒いでいるのを見て廃貨の事実を確認した。ただちにラーショウへの移動をあきらめ、チェックアウトしたばかりの国営のマンダレイ・ホテルへ戻り、ホテル内にある国営旅行会社（トゥーリスト・バーマ）のオフィスでその日のラングーン行き夜行列車の切符を購入することにした。

ホテルではすでにレセプションが該当紙幣の受け取りを拒絶し、外国人旅行者が混乱に陥っていた。一方、国営旅行会社のカウンターでは、25、35、75チャット各紙幣での列車や飛行機の切符の販売には引き続き応じていた。これは上司の大英断によるもので、筆者も無事にそれらの紙幣を使ってその日の夜行列車指定席乗車券を買うことができた。

上述の「闇商人」の知り合いの情報に基づくと、同日夕方から市内南西部のマハーミャムニ・パゴダ一帯で僧侶らがデモを開始したが、大規模なものには至らなかった。しかし、翌日（9月6日）午前9時頃、マンダレイ大学構内の各寮に住む学生たちの動きがあわただしくなり、その後約500人が警察の制止をふりきって学外に出てデモを始めた（ただし医科大学の学生は参加せず）。これには前夜（9月5日夜）の夜行でラングーンを出たラングーン大学の学生ら4名が6日早朝にマンダレイへ着き、マンダレイ大学の学生らを扇動し

たためという説もあるらしい。

正午前までに学生のデモ隊は前述のマハーミヤッムニ・パゴダ近辺の僧侶らと合流し、市内 84 番通りを南から北へ向かって動き始めた。一般市民も少しずつ加わるようになり、デモは暴動へと発展し、映画館、協同組合の店、一部政府系建物などが放火されそうになったり投石の被害を受けた。信号機も多くが壊された。中央市場は急遽閉鎖され、焼き討ちを恐れて逃げ出す商人らもいた。暴動参加者は 2000 人以上いたという。

筆者が 9 月 14 日から 3 日間再訪した際に訪ねた 84 番通り在住のルードゥ・ドオ・アマー（著名な文学者、元『人民新聞』社主）によると、デモは大変激しかったが、あくまでも突発的なものであり、指導者もなく、方向性に欠けていたため容易に鎮圧されたと言う。また、デモ参加者の逮捕が現在進行中であるとも語っていた（9 月 16 日談）。

マンダレイでは廃貨後に物価が急激に下がり、特にガソリン代が急落した（1 ガロン 90 チャットから 20 チャットへ）。これは中額と高額の紙幣が使えなくなってしまった消費者による購買力の一時的落ち込みによるものである。筆者が再訪した 9 月 14 日と 15 日は市内に活気がなく、普段から少ない車通りもいっそう減り（ひきつづき自転車を利用する市民は多い）、中央市場も 3 分の 1 以上の店が閉まって閑散としていた。筆者の知る限り、今回の主要紙幣廃貨令を支持する市民はおらず、多くの人々は苦しみ、声には出せないものの、政府に対して強い不満を抱いていた。

〈地図〉

